



Title	懷徳堂遺物寄進の記
Author(s)	中井, 木菟麻呂
Citation	懷徳. 1933, 11, p. 68-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88887
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德堂遺物寄進の記

中井 木 菟 麻 呂

吾が家の藏品にて大阪府立圖書館に寄託してある懷德堂遺書遺物と稱ふる物には自から二種類がある。一は舊懷德書院の屏障門聯扁額等、純ら書堂に附屬して、寛政再建以後に於ける書堂の裝飾となつてゐた者の中で、今に残存してゐる者にて、假に懷德堂甲種遺物と稱し、一は菴菴竹山蕉園碩果の遺書類、専ら中井氏一家の遺品に屬する者——履軒柚園に屬する水哉館の遺物は別である——にて、懷德堂乙種遺物と稱してゐる。舊幕時代には此のやうな區別はなかつたのであるが、予は便宜上此のやうに別稱してゐるのである。

甲種遺物には掛幅屏障堂聯等數多くあつたのであるが、多くは明治己巳廢校の際に失はれて、今の遺物は僅に其の一部が残存してゐるに過ぎないのである。此等は廢校の後、乙種遺物と共に大阪府加島村の親戚小笠原氏の庫中に預けてあつたのを、先子の没後、家を東京に移して後は、久しく上野の帝室博物館に託存してあつたのだが、明治四十四年十月、懷德堂記念會の主催にて、大阪博物館美術館に於て、懷德堂展覽會を開設せられた際、乙種遺品及水哉館遺物と共に出陳し、閉會後大阪府立圖

書館に寄託して、今日に至つたのである。

重建懷德堂の建設せられて後、余はその基礎の安定するを待ち、或る適當の時期に於て、甲種遺物丈を新講堂に寄進するつもりであつたので、松山博士教授の時代に、その旨を同教授に話しておいたのである。

或動機に因つて、今之を實行する時期が到來したので、余は今茲十月の例祭を期して、甲種遺物四十七點を懷德堂記念會に寄進して、永久の保護を託請するつもりである。

就ては今その遺物目錄を列記して、その解説を試みやうと思ふ。

▲記 錄 類

懷德堂記錄十二冊並に書類十二通

金具付小簞笥に藏む

一、學問所建立記錄	一	冊
一、懷德堂定約附記	一	冊
一、懷德堂內事記	一	冊
一、懷德堂外事記	一	冊
一、學校公務記錄	二	冊
一、懷德堂義金簿	一	冊

一、御 同 志 中 相 談 覺

一 冊

一、三宅幸藏變宅ニ付御同志中懸合覺

一 冊

一、逸 史 献 上 記 録

一 冊

一、義 金 助 成 金 簿

一 冊

一、助 成 金 書 類

八 通

一、竹 山 先 生 遺 狀

四 通

附懷 德 書 院 掲 示

一 冊

懷德堂文書六卷

金具附小簞笥に藏む

一、學 問 所 建 立 文 書 上 第 一 卷

五井藤九郎三宅才二郎中村東庵道明吉衛門備前屋吉兵衛宛、中井忠藏

一、學 問 所 建 立 文 書 下 第 二 卷

中井忠藏宛、大島古心 同、三宅石庵 同、三輪善藏 題簽執齋先生書牘六字中井竹山筆跡

一、學 校 再 建 文 書 第三卷

學校類焼後澁井半七を以て大阪城代に伺ひたる口上書控開首書 添竹山 吉村又一郎七尾誠見水野

清右衛門大津多丹治宛、中井善太中井蕉 関手書 口上奉申上候覺、水野理兵衛宛、中井善太寛政

七年七月六日學校再建聞届書、中井善太宛、西奉行松平石見守色紙竹 山手書

一、大 阪 學 校 書 類 第四卷

書生謝儀並に勝手向立方十一條、寶曆寅七月廿五日中井善太 定三條寅八月、定六條丙

午四月、定八條未九月以上竹 山手書 男部屋火用心 竹山 遺狀下書四條 竹山 助力銀控二枚 竹山

同志中被差出候口上書寫、中井 七郎

一、學 校 公 務 書 類 第五卷

口上書を以申上候、午四月日學問所預り中井善太印 口上書を以申上候、五月八日學問所

預り中井善太印 奉願候口上覺、午五月日學問所預り中井善太印 包紙、願書案文、筆迹不詳、 捨子行倒云云、並河復一手書

覺 西奉行所初人 案文包紙竹山 安永四年六月中井善太、及別紙六月中井善太、奉伺候口上覺、丑十一月廿

四日學校預り中井善太、奉伺候口上覺、六月廿四日中井善太、口上書を以奉伺候二條、

寛政九年丁巳八月中井善太印、口上書四通、竹山

一、衙 尹 御 入 請 書 第 六 卷

衙尹學校 江御入諸書記、中井修治筆迹 御案内方惣代、中井七郎宛、古屋源之祐大須賀鎌次郎安

東保兵衛吉田富之亟、五月晦日中井修治宛 肩書文久三年云云 大須賀鎌次郎吉田富之亟、五

月晦日中井修治宛 肩書文久三年云云 寺社方御役人宛、六月朔日中井修治、加藤源七藤野四

郎返事、内山彦次郎、正月廿日中井修治宛 西奉行久須美佐渡守御入通知書、中井修治

右は懷德堂展覽會出陳の爲、舊籠中に保存せられたる書類を収集分類して六卷に裝成したのである。

一、學 問 所 來 歷 一 卷

▲扁 額 門 聯 類

一、懷 德 堂 記 額 面

中井竹山撰並書、講堂南側東寄の楣上に掛けられた者のマクリ

一、白 鹿 洞 掲 示 額 面

中井履軒筆迹の拓本、首二三行剝落す。これは履軒が柳公權を學んで居られた時の書である。と並河寒泉翁の話に聞いてゐる。

其刻板は廢校後山片平右衛門氏の有に歸して、愛日小學校の藏品となつたが、今の懷德堂が再建せられた時、永久借用の契約を以て講堂に掛けられてある。此の刻額は寛政再建後、講堂の北側の中央に掛けられてあつたが、或時その重量の爲に落ちた事があつたので、將來の危險を慮りて、拓本に取り換へられたのだと聞いてゐる。後には之を打撮して希望者に頒つことゝなり余も幼時試みた事があつた。

一、懷德堂講堂楣上小障宋六君子圖

周子程伯子程叔子は薛關月筆、張子司馬子邵子は中井藍江筆、朱文公贊辭は賴春水書。

周子

道喪千載聖遠言湮不有先覺孰開我人書不盡言圖不盡意風月無邊庭草交翠 賴惟完□□

程伯子

揚休山立玉色金聲元氣之會渾然天成瑞日祥雲和風甘雨龍德正中厥施斯傳 賴惟完□□

程叔子

規圓矩方繩直準正允矣君子展也大成布帛之文菽粟之味知德者希孰識其貴 賴惟完□□

張子

坐悅孫吳晚逃佛老勇徹阜比一變至道精思力踐妙契疾書訂頑之訓示我廣居 賴惟完□□

司馬子

篤學力行清脩苦節有德有言有功有烈深衣大帶張拱除趨遺像凜然可肅薄夫

賴惟完□□

邵子

天挺人豪英邁蓋世駕風鞭霆歷覽無際手探月窟足躡天根閒中今古醉裡乾坤

後學藝藩賴惟完拜書爲

懷德書院祭酒

竹山先生

告

寛政九年歲在丁巳閏七月望後五日

□ □

本圖六幀は透彫の枠に入れて楣上にかけてあつた。畫趣幽妙疎淡にして古色掬すべきのみならず、細書の清麗高絶なる、眞に景仰すべき者がある。久しく裏打したまゝであつたのを、懷德堂展覽會の節、之を懸額に作つたのである。書堂閉鎖の際、表具師がたち物庖丁を以て透彫の枠から切り離してゐるのを見て、重心悲慘に勝へなかつた情況を今も目前に見るのである。

一、懷德堂壁署三面 竹山手迹

定

一講談聽聞五節句之禮被務候方は於玄關帳面に記し被置學主助講預りへ銘々被仰通には不及候謝儀も右之趣に可有之事

但し舊識別懇之方讀書手跡等稽古の方は可爲格別候惣じて謝儀は禮調ひ情達し出席致しよき事第一にて以後は貧學之方は紙一折筆一對等を以て禮式とせられ候も不苦候一讀書手跡は稽古の爲逐はれ候方は學主にても預りにても被相頼候方而已謝儀可被差出事但し故障の節は誰にても可致世話候得共別段に謝儀等之心遣一切可爲無用候

以上

寅八月

定

一書生之面々互に申合せ行儀正敷相守り假初にも箕踞偃臥等致間布事

一學談雅談之外無益之雜談相慎場處柄不相應之俗談堅く可爲停止事

一當病持病等之子細も無之分晝寢宵寢堅可爲無用事

一本業出精之暇には手跡算術詩作譯文等銘々之分相應に心懸て間斷有之間布事

一休日其外閒暇之節に和漢之軍書並近代の記録物等心懸讀可申事

一 碁象棋謠などは世の交り並に學業退屈之氣を轉し候爲に兼而差免し有之候へども休日の外は晝の内右様之雜藝に懸り候儀可爲無用事

一 銘々行届不申事は同輩の内より互に心を添切瑳可有之事

一人々に切瑳を受却而立腹抔致候は、傍人より早々其段可申出事

以上

安永七年戌ノ六月

定

一三八夜講二七朝講定式講筵之謝儀近來混雜に相成候已來は先規之通り別段に講堂へ御

納可被成候尤御出席之印を被表候耳にて候新來之御口普く御承知のため如斯候 以上

安永六年丁酉正月

學校行司

以上定の内多分安永七年のであつたと思ふが、學校預り人桐園が毎休日の朝寄宿生を講堂に集めて、讀み聽かせられるのがきまりであつた。

一、曲 肱 榭 額 の マ ク リ

曲肱榭は己有園東南隅の亭榭にて、常に物見というてゐた。家族の者がよりかゝりて、

簾越しに門前通行の行列等を觀る所である。此の額はこゝにかゝつてゐた物であらうと思ふが、余が幼時にはなかつた。

此の亭榭はあら木にて造りたる極めて粗雑な物であつたが、竹山履軒が壯年の頃手細工にて造られた物だとも聞いてゐる、或はさうかも知れない。

二、己 有 園 額 搨 本

懷德堂己有園の東北隅には自然木版に三宅石庵書己有の二字を刻したる額が掛つてゐたが、是は雙鈎にとりたる搨本である。其自筆は中河内郡久寶寺村の親戚稻垣環二氏の家にかけてある、大方それから寫したのであらう。

一、入 德 門 聯

力學以修己 立言以治人

是は竹聯にて、竹山の書である。その楣上に同じく竹山の筆迹にて入德之門と題したる刻額があつたが、今は散逸して、所在を知らない。書堂閉鎖の際、此の額が昔の五舎の一なる桃舎の額と共に玄關の式臺に抛り出されてあつたのを覺てゐる。大方賣り拂はれたのであらう。それにしては竹聯の残つたのは不思議である。明治元年の春、車駕親

征の砌、山階宮晃親王殿下が突然懷德堂に臨ませられた時に、玄關よりせずして、直に庭園から講堂に上らせられたが、その折に通行成されたのは、此の入徳門である。

此の外懷德堂には、竹山筆迹の階聯堂聯北牖聯の諸聯があつたのだが、今は一も家に残つてゐない。その中の一は石切劔箭神社の木積一雄氏が所藏して居られる。

▲屏障掛幅類

一、懷德堂幅

石庵先生の筆迹にして、今の懷德堂の開堂式の砌、他の遺物中から分けて寄進した刻額の原本である。最初此の額は講堂にかけられてあつたさうであるが、いつの頃よりか刻額を造りて、玄關に掛ける事となり、本書は掛幅に仕立てられてあつたのを、余がその金装だけを存し、外部の表装を切り離して、保存の便を謀つたのであるが、懷德堂展覽會出陳の爲、復掛幅に仕立直したのである。

一、朱文公大書四訓墨本 四幅

讀聖賢書 立修齋志 存忠孝心 行仁義事 晦翁□□

此は竹山が本書を徳川將軍家から拜借して、篆工前川虚舟に摹刻させた者である。舊書

院の東房には、大衝立に張られて、書院の表識となつてゐた。この幅はその衝立ではないけれども、廢校以前にすつてあつたのを掛幅に仕立てたのである。

一、冽 菴 先 生 雙 幅

小艇水雲洞口孤琴秋月山陰郢曲向來誰知林泉亦有知音

出岫雲非有意忘機鳥亦知歸莫話城中舊事與君同是荷衣

冽菴

函題は中井碩果の手書。此の外に竹山履軒の代表的雙幅があつて、碩果が懷德堂藏の函題を残しておかれたものであつたが、今は他人の有に歸してゐる。

冽菴先生のは一旦破損して、多年間他家に借與して、箱のみ家にあつたうちに改裝せられたので、寸法が箱と揃はなくなつてゐる。

一、竹 山 咏 福 壽 草 詩 幅

誰分禹疇目小草得佳名歲々氷霜底開花應夏正

竹山居士□□

此は毎歲懷德堂の新年掛幅となつてゐた三幅の一である。左右に掛けられた履軒蕉園の二幅は失はれた。

一、並河寒泉教授が出懷德堂歌

百餘り四十四とせの文の宿けふを限りと見かへりていつ

華の翁

これは懷德堂退轉の時、寒泉翁が堂構子今百卅年の詩と共に門扇に張りつけて出られた歌である。本紙はすぐに人に剝ぎ取られてしまつたが、後年余が別に認めてもらつておいた物である。

一、懷德堂講堂障子

文晁筆歸馬放牛圖

雙幅

此の圖は最初講堂と西夾との取り合の襖障子であつたのを、いつの頃にか剝されて、保存してあつたのを懷德堂展覽會の際に二大幅に仕立てたのである。

寛政再建の頃、谷文晁が懷德堂に宿泊してゐた事があつて、その際此と鵲巢圖とを揮毫したものを見わる。所謂寛政文晁にて、數十年間の古色を帯びて、寛明秀潤の筆力を具へてゐる。鵲巢圖は腰高の障子に畫かれてあつたので、漫漶して、色彩を辨せざるやうになつてゐた。今は残つてゐない。

一、懷德堂繪圖屏風 壹雙

西村碩園博士が海外旅行より歸られた際、網嶼の鮎字にて歡迎會があつて、余も招請に

預つたが、同日加島村小笠原氏に預けてあつた懷德堂の刻額や、破れたる竹行李を取り來りて、鮎宇の席上に開展したのであつたが、その行李の中には、余も始めて見たる懷德堂の繪圖類や諸種の記録類などがあつたが、懷德堂展覽會の際、それらの繪圖類や家に保存してあつた書類より懷德堂の構圖に關する者を收輯して、大屏風壹雙を造つたのが是である。

第一版

一、大阪尼崎町一丁目學校類焼前之圖(題字) 二、學校圖面(甲)
尼崎町一丁目學校表口十一間四尺五寸裏行二十間(桑名克一手寫)

第二版

一、學校圖面(乙)
桑名克一手寫 二、右、甲の一部一部模様替(蕉園寫)
左、乙の一部一部模様替(竹山寫)

第三版

一、竹山手簡二、上の續明和三年二月十二日川井立牧宛、中井善太、三、右上、丙上方の一部、下、乙右手下方の一部 左、丙中央の一部 四、丙下方の一部(桑名克一手寫)

第四版

一、善太宛表所書簡、二、大阪學校之圖(丙) 三、今橋筋一丁目、東西十一間四尺五寸、南北二十間、天明二年壬寅冬十一月二十三日、桑名克一書于寧靜舍、

第五版

一、善太苑、西寺社方役人書簡 二、右、丙圖左方取替、(桑名)左、上の返簡(蕉園)・三、
丙圖左方の下部及下方取換(桑名) 四、屈書の草稿、寛政六年學校圖面に添へて(竹山)
第六版

一、學校圖面(丁)丁は戊の下圖、聖廟を設く、(竹山寫) 二、學校圖面(戊)寛政五年幕府に差出したる者の下圖、聖廟を設く、(竹山寫)
第七版

一、寛政五年癸丑八月學校舊地面再建繪圖(題字) 二、下圖上部の模様がへ 三、學校圖面(己)寛政五年幕府に差出したる二枚の一聖廟を除く、(竹山寫)

第八版

一、屈書、寛政六年、前稿の淨寫 二、上の續(竹山) 三、屈書の添寫(竹山) 四、上の續

第九版

一、學校再建許可、西奉行所申渡書 二、屈書、寛政六年寅二月(竹山) 三、右、懷德堂上梁文、左、續(蕉園) 四、大工積書包紙 五、右、板圍取拂願文、左、板圍願文(竹山)

第十版

一、懷德堂結構新舊圖(題字) 二、學校最舊繪圖、筆者不詳 三、右、學字瓦、左上、上圖の後、
下、圖面用所不明(蕉園) 四、右、庚圖の二階、左、用所不詳(竹山)

第十一版

一、大阪府學五舍之銘(碩果) 二、圖面、用所不詳(竹山) 三、右用所不明 左、同 四、學校圖面(辛)(桐園見積圖)

第十二版

一、再建學校間數疊類記錄(竹山) 二、學校圖面(庚) 寛政七年乙卯七月六官命を受け候學校再建圖、同八月十日鉦始(竹山)

▲典籍器物類

一、懷德堂考定中庸定本 一 卷

石菴先生考定春樓先生書

一、中庸 錯簡說 一 卷

竹山先生撰並書

中庸定本の拓本は竹山書履軒題字蕉園跋にて、寛政十二年に刻成せられた者があるが、今其刻板は存して居らぬ。

一、懷德堂記帖 桐箱入

石菴先生題字竹山先生撰並書

これは懷德堂記の一本、題字を合せて、碩果が大帖に仕立ておかれた物である。

一、勢

語

通

四

冊

蘭洲先生著並手寫

一、蘭洲先生刪正日本書紀

四

冊

一、蘭洲先生遺本康熙字典

全

函

書殼蘭花模様、卷中處々に蘭洲竹山二先生的首書がある。

一、萬年先生論孟首章講義

一

冊

筆書不詳。是も加島村小笠原氏に預けおきたる竹行李の中から見出した者である。その中に學問所の開講が十月五日であつた事が載つてあつて、それを鮎字の席上で披露に及んだから、懷德堂祭典の日が卽座に定つたのである。

一、懷德堂本大日本史

箱入六十冊

内三冊闕

常藩の大日本史は往昔二三藩邦に傳寫せられたる己にて、民間では容易に閱覽することができなかつたのであるが、竹山は堀田出羽守が二條在番の頃より知遇を蒙つてゐたの

で、その紹介にて某侯の藏本を借覽することができたから、寫手を一堂に會し、明和八年十一月中旬から始めて、翌年二月下旬に寫し上げたのが是の書である。その寫手は左の通である。

三宅正誼	中井積善	中井積德	加藤景範	小柳克明	源文蔚
川上重教	古林相如	谷川方至	奥崎庸行	早野辨之	岡信之
鈴木文鱗	足立衛	蓑島正常	藤好章	小林義方	福島崇
松尾時中	早維祺	原興隣	鈴木裕	竹島久道	中村有則
福田以文	秦思齋	廣崎子胤	鈴木德本	大江周行	辻本翱中
阿部貞良	岡橋爲光	村上豐章	田中遜之	金崎元永	盛高馬城
西原良菴	共三十七人				

此の中校正者は三宅正誼中井積善中井積德加藤景範の四人である。

三冊の不足は以前何人にか借して返らないのであらう。

一、菊 章 刀 子 箱 入

慶應戊辰の春大阪御親征の砌、山階宮晃親王殿下が懷德堂に臨ませたまひし時に賜はつた者である。その囊は白河樂翁公の龕帳になつてゐた古金欄を得たので。之を用ゐて造つたのである。

一、木 司 令

懷德堂所用、蕉園題字並銘。

二、螺 鈿 韻 匣

懷德堂講堂の床間に見臺と並べて置かれてあつた螺鈿の十二硯匣の一にて、蠟石に刻したる履軒筆迹の韻字を陥入してある。他の硯匣は皆散逸してしまつた。

以上共四十七點

富 永 仲 基 の 論 語 徵 駁 說

吉 田 銳 雄

富永仲基の事に就ては、已に斯界の人の周知する所であるから、敢て茲に贅言する事を省略するが、私は曾て池田人物誌中に此の人を取入れた爲に、多少其の遺書搜訪に留意して居る、然るに先般懷德堂書庫に收まつた故西村碩園先生の藏書を整理中、井狩雪溪（名は總、字季群、大阪の人、明和三年十月十九日歿）の著述に係る論語